

国語**【解答】**

I

問 1	問 2	問 3	問 4	問 5
d	c	b	a	c
問 6	問 7	問 8	問 9	問 10
d	b	e	b	d
問 11	問 12	問 13	問 14	問 15
c	a	e	c	c
問 16	ケーキは砂糖の大量輸入のために安く、逆に白パンは良質小麦の供給不足のために相対的に高かった。			

II

問 1	問 2	問 3	問 4	問 5
a	c	b	d	d
問 6	問 7	問 8	問 9	問 10
e	a	e	d	a
問 11	問 12	問 13	問 14	問 15
b	e	b	c	d

【学習アドバイス】

本学の入試は100分間の解答時間で2科目を選択解答する。国語を選択した場合は約50分間で現代文の大問2題に解答することになる。総設問数は31問、その内訳は5択の選択肢問題が30問、50字以内で解答する記述問題が1問だった。「1問あたり1分半」で答えを出せば、全問に解答することは可能だ。

しかし、大問Ⅰの文章量が約3,800字、大問Ⅱが約5,500字である。大問Ⅱの文章は改行が多いので文章を読むのに要する時間は実質的には大問Ⅰと大きな違いはないとみなしても、4,000字前後の長文2題を「一度ざっと読む」だけでも合計10分以上はかかるのではないだろうか。だとすれば、上記の時間配分は大幅に修正せねばならず、「(記述問題を除いて)1問あたり1分前後」で解答するつもりで準備しておくべきだ。

以下、3点に絞って具体的な学習アドバイスを示しておきたい。

第一に、上でも述べた「長文読解対策」である。2017年度に出題された文章は、鹿島茂『パリ五段活用時間の迷宮都市を歩く』(中公文庫)と和田秀樹『感情的にならない本』(新講社)からのものだ。例年同様、平易な表現で書かれた評論あるいは随筆(エッセイ)であり、高校生にも読みやすい文章だろう。とはいえ、約4,000字の長文である。上で述べたように「1問あたり1分前後」のペースで設問を解くとしても、「文章全体を10分で読む」となればかなりの速読力を要求される。対策としては、①文章全体を、二度も三度も読み返す時間的余裕はないので、「本文を読み進むのと並行して各設問に解答していく」方法をとること。②ふだんから長文を要領よく読みこなす訓練をするため、「教科書に載っている文章の出典」あるいは「本学の過去問として出題された文章の出典」を入手し、1章分ずつ「制限時間を10分」と決めて「要点をチェックしながら読む」とよい。

第二に、「語彙力の増強」である。2017年度の出題内容は、漢字の読み取り問題が1問、傍線部の熟語と同じ漢字を用いる語を選択肢から選ばせる問題が1問、傍線部の語の対義語を選ばせる問題が2問、傍線部と同義の四字熟語を選択肢から選ばせる問題が1問、慣用句の意味を問う問題が5問、文脈をヒントに空欄に入る語句や文章を推理する問題が19問、傍線部に関する本文の文脈把握問題が2問となっている。さらに、「文脈をヒントに空欄に入る語句や文章を推理する問題」の中で、日常的な接続語・呼応表現・擬態語・四字熟語の知識で決まる問題が7問、評論や随筆(エッセイ)などで頻出の文章用語の知識で決まる問題が8問ある。要するに、全31問中で25問が語彙力(言葉の知識)で決まる問題であるということだ。対策としては、①学校の教科書に載っている「評論」「随筆(エッセイ)」の中で「意味がわからない語句をチェックしておいて辞書で調べる」ことによって語彙力UPをはかること。②国語便覧や現代文用語集のようなサブテクニクスの中で「対義語」「慣用句」「四字熟語」「評論用語」などのページに繰り返し目を通すこと。特に例文を書き写すようにすれば「文脈の推理力UP」にもつながるので一石二鳥だ。③漢字の読み書きに関しては、2017年度は2問しか出題されなかったが漢字の書き取りが10問ほど出題された年度もあるので、問題集を1冊はやっておくべきだろう。

第三に、「文脈把握力」と「論述力」をUPさせることである。2017年度全31問中5問は語彙力で決まるというより「空欄や傍線部前後の文脈の把握力」で決まる設問であり、毎年1問出題される50字以内での記述問題は「空欄前後の文脈から読み取ったヒントを正確な日本語で文章化する力」で決まる設問といえる。対策としては、①空欄や傍線部前後の「言い換え」「対比」「因果関係」を意識的に探す練習をすること。②30字～60字程度の解答字数の記述問題を集中的に演習すること。①、②を両方満たすためには、本学の過去の入試問題を解くのはもちろん、記述問題中心の問題集を1冊こなすことをオススメする。